

インターネット時代における 研究者と図書館の関係

土屋俊(千葉大学)

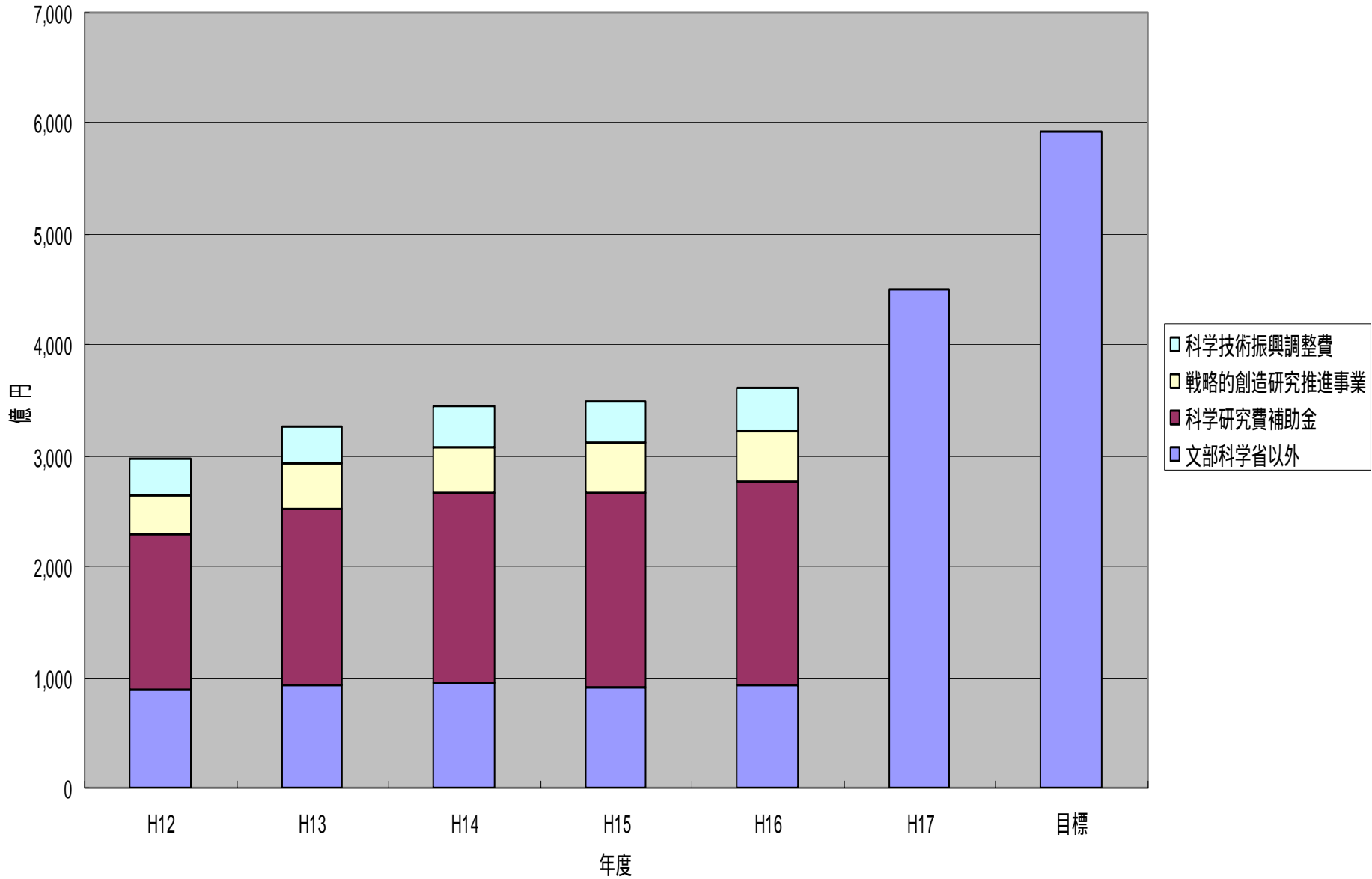
目次

- 研究を取り巻く環境の変化
- 図書館を取り巻く環境の変化
- そもそも研究の図書館の機能とは。そして、日本におけるその歴史
- これからの課題
 - 研究スタイルの変化の把握
 - 機関リポジトリとの関係

研究を取り巻く環境の変化

- さまざまな変化
 - 競争的資金化 プロジェクト単位の資金(資
料費への影響(間接経費)の問題)
 - 独立行政法人化 短期的成果の重視(成果
の評価方法の問題)
- インターネット時代への変化
 - よりスムーズな流通(プレプリントサーバの成功)
 - より国際的な流通(日本の「学会」の問題)
 - コミュニケーション・スタイルの変化から研究スタイルの変化へ(電子投稿・電子査読の普及など)

競争的資金



(研究) 図書館を取り巻く環境の変化

- インターネット利用オンラインジャーナルの普及
 - 研究者は図書館へ来る必要はない
 - 物品購入から許諾契約へ
 - 利用の記録が残る
 - 長期保存についての不安
 - 目録・目録共有からクローラー型検索エンジンへ？
- 予算の位置づけ
 - 科学技術基本計画の特異性(文献？)
 - 「間接経費」の位置づけ
- 組織の位置づけ
 - 人員削減・専門性

歴史的反省(1)

- 日本の(大学の)研究図書館とは？
 - 学問そのものの翻訳的体質
「解体新書」型学問 = 研究者は翻訳家
 - あるいは、「蕃書取調所」 日本^の大学(加藤博之、伊藤圭介などなど)
 - あるいは、「文部省留学生」 日本^の学会(古市公威など)

要するに、研究者は(日本の国全体にとって)外国文献担当図書館員だった。

研究図書館員は不要！

歴史的反省(2)

- 蔵書構築？
 - 予算は、研究者・研究室の手にあった
 - 図書館による蔵書構築は夢物語
 - とくに、雑誌購読について矛盾が集積
 - 他方で、集中化(場所と契約)
- 目録？
 - 現在のNACISIS-CATの重複書誌問題の遠因はどこ
- 結局、「返戻本」の倉庫

競争資金化

- プロジェクト単位の研究が増加する
 - それを支えるべき機関としてのインフラ整備を行う費用の正当化が必要になってしまう
 - 研究者は直接経費を守ろうとする
- 図書館にとっては、
 - 継続性の危機
 - 安定性の危機
 - 存続の危機
 - まあ、いろいろな意味でチャンスでもあるが、、、

評価の問題

- Impact Factor濫用論
 - もともとは雑誌の(キャンセルのための?)評価指標なはずなのに、、、、
- 非引用数のカウント
 - Web of Science
 - SCOPUS
 - Google Scholar
- アクセスのカウント
- 名寄せによる機関の評価
 - 図書館でやるしかないのでは 機関リポジトリ

インターネットによる研究スタイルの変化？

- プレプリントサーバで何が変わったか
 - もともとその分野の人はそのように行動していた
 - Author's final draft(submitted)の完成度が向上(いや、TeXのおかげ?)
- アクセス・ログの信頼度
 - たしかに、COUNTER。でも、本当に何が起きているかはわからない。おそらく分野でも違う。研究が必要。
- コミュニケーションは？学会は？？？

機関リポジトリの諸問題

- 定義問題

- とくに「オープンアクセス」のからみで

- インプリメンテーション問題

- ほとんど問題はなくなっている。既存の図書館システムとの関係は？

- 制度問題

- これが一番大事。図書館では無理。

- しかし、図書館でないとも無理。

機関リポジトリをめぐる諸説紛々をちょっと整理する

- オープン・アクセスからの議論
 - セルフ・アーカイビング派 (Harnad、UK 下院 Select Cmmtt等)
 - オープン・パブリッシング派 (CDL、Boston College、SPARC白書等) 新型大学出版会？
- コレクション構築からの議論
 - Uva流古典的議論 (= 日本の「電子図書館」)
 - コーネル大学流 (arXiv.org, Euclid—ちょっと変則？)
- e-Learningからの議論
 - たとえば、OCW (DSpace)、ELI@Yale
- 大学論的アプローチ
 - Caltech流

要するに、機関リポジトリとは

- **機関の責任**において設置され、運営される
- **機関の資源**によって設置され、運営される
 - したがって、文書を利用することによって、利用者が費用を負担することはない
- (原則として) 機関内で作成された**文書類**を保存する
- 保存は**電子的**に行う
 - 電子的に保存された文書は、インターネットを経由して誰でも利用可能である

研究機関になんのメリットがあるのか？

- 機関のアイデンティティの確立
 - 研究と教育に関する社会的説明責任の履行
 - RAE・QAA的評価およびアクレディテーション的評価への対応
 - 歴史的アイデンティティの創造と継承
- 研究者にとっての研究インパクトの増進
- 研究者としての社会的責任
 - 科学コミュニケーション教育の資源
- 蓄積した研究資源の社会還元

「コレクション」の新しい意味

- これまでのコレクション
 - 外部からの導入:「ものを買う」
 - 選書:すでにあるものを選ぶ ライセンシングへ
 - ビッグディールによる変化(けっして悪くなかった?)
- これからのコレクション
 - 自分のキャンパスでできたものを集める(「発信」? むしろ保存(とアクセス))
 - 選書でなく、企画(教育・研究状況の把握・連携)
 - arXiv.org、Project Euclidなどのコーネル大学のコレクション
 - 「出版会」との関係(スタンフォード大学の場合)
 - デジタル・リソースの管理の問題